

2009年訪問活動概略

1月10日

(「震災被災者とボランティアの集い」のため訪問活動は行わず)

1月24日

・80代女性、一人暮らし。震災前までは風邪も引いたことがないのに、震災で頭を打ち、ストレスから毎日病院通い。数年前に子宮筋腫を取ったほか、肺がん、糖尿病を患う。この病気はストレスだと医者と言った。年もとったせいか、肺がんは小さく固まったのでそれ以上治療はしていない。「ただ、ただ、1人ぼっちが寂しい」と言われた。「今低血糖で甘味を取って身体を横にしていたので、中に入って話しをしてもらえないか」と言われてのお話し伺いだったが、疲れていなければもっと話したそうだった。「電話下されば伺います」と言って別れた。

・70代女性、一人暮らし。灘区で全壊。家は屋根瓦が崩れた。近くにテントを張って親戚や娘夫婦と孫2人で過ごしていたが、とても寒くて水もなく、近くの保育所に避難した。どういう訳か、ここはパンとコーヒーだけ、時々炊き出しがあったので何とかしのげた。2人の孫娘さんは3歳と5歳だが、1人が訪ねてきており、話題に加わってにぎやかになった。ご自身は5回目で北区の、娘夫婦は神戸の方の仮設住宅に当たった。ご主人は56歳で亡くなった。ご自身は仮設住宅が解体されるため、ここがあてがわれたが、夏は暑く冬は寒く、便利が悪かった。バスは1時間1本で、自分と主人の年金で食べることは出来るのでと元気に話して下さった。今は骨そしょう、高血圧、メヌエル。また仮設住宅にはネズミがたくさん出て気持ち悪かったと孫娘さんが言った。ただ元気な方で、肩に手を回して握手をしてでた。感無量だった。

・60代女性、一人暮らし。垂水区で被災。震災の前年の11月に舞子に引越した。長田に住んでいたのも、もし引越ししなければ家具の下敷きになっていただろう。この復興住宅には市営住宅の建て替えで入居。平たい土地なので自転車で何処へでも行けて便利。親しい人が偶然近くに来て、入居して直ぐに出会えたので、割合早くこの地にもとけこめた。これだけコンクリートの建物が建っていると気が変になりそうで、実際ご自身も救急車を呼んで日赤病院へ運ばれた。この棟は自治会がないので困る。掃除にしても困ってる人を手伝うにしても話しが出来ない。ご自身は60代後半で、元気で一人暮らしだが、今後年を取ったときのことが心配。

2月14日

・60代男性、3人暮らし。灘区で全壊。2階建てが1階になるほど倒れた家屋が多く、向いの道に柳の木があって、家を支えてくれたので死なずに済んだ。子どもたちはいち早く外に逃げていて、家の中には奥さんだけが取り残されたが、冷蔵庫の横にうずくまっていて、何時間か後に助け出された。避難した小学校では、変な人がうろつき火を投げ入れたりして大変だったが、全員無事で何より。仮設住宅がなかなか当らず、知人の家に4年いて、バイクで通勤していた。趣味が多く退屈しないとも言われた。前向きに生きておられるのを感じた。

・70代女性、一人暮らし。長田区で被災。着のみ着のまま逃げた。文化住宅の2階だった。1階の人は亡くなった。逃げた後全焼したので何も持ち出せなかった。小学校に避難して、4月にはポートアイランドの仮設住宅に入居した。肺がんで10ヶ月しかもたないと言われ、ポートア

イランドの病院に入院していたご主人は、診断された通り本当に10ヶ月後に亡くなった。家具も何もない仮設住宅で葬式を出した。仮設住宅にいるとき友達になった人に便利だからと言われて、この復興住宅を申し込んだ。当ってから入居まで2年待たされたので、仮設住宅には4年あまりいた。フラフラするのでおかしいと病院へ行って調べてもらったら脳梗塞の跡があった。今は近所の医者が週2回往診してくれるので助かる。ほとんど外へ出ない。テレビもご飯時につけたりすると気持ち悪い。2つのことが1度にできない。大阪に息子がいて正月に来たりするが、世話ができないから泊らないでくれと言っている。農家の出で若い時は農家に嫁にいったが、そこのお姑さんと折り合いが悪く、出稼ぎ先から子どもと私を呼んで家を出た。いろいろなところの工事の仕事をし、子どもたちも文句も言わず恥ずかしがらずについてきた。今は家賃のことは心配ない。何時倒れるか判らず心配なので、入浴前は血圧も測るようにしている。

・60代男性、母親と2人暮らし、中央区で全壊。家財道具は持ち出せず。そのままポートアイランドの仮設住宅で3年間暮らす。復興住宅には幸い直ぐに入ることができた。その後健康に問題があり、何度か入院している。80代の母親の面倒を見ている。時間があるとき、シートを書いて下さる。

・70代女性、一人暮らし。長田区で被災。ご主人を2年前に亡くした。2階建てが1階になり家族が皆埋まった。お母さんは隣の家の土台まで飛ばされて、うちの家の梁に挟まれていた。皆んな怪我はなかったけれどたいへんだった。西神の大きな仮設住宅にいた。この復興住宅へ入って、カラオケの会を立ち上げてレッスンを受けていると、沢山の楽譜を見せていただく。是非一曲をお願いして「いいじゃないか」という曲を歌って下さった。西神からこの復興住宅へ入ってよかったと思っている。古いしがらみのある長田だったら、こんなに楽しく生きられなかったかも。ご主人は商売人だったが、美術館に行ったり、古いものが好きで、私のような無学な人間をよく育ててくれたと思う。息子もよくしてくれて本当に有難いと思っている。この棟で付き合っている人は5人で多くはない。ゴミの分別方法が変わったのでそれを機に他の人とも話すが、上の階は若い人が多いので知らない人が多い。友人たちと「しゃきっと生きようね!」と話してるんよ、とおっしゃる花のように明るい人だったので、こちらがもてなしを受け、ボランティアをされている気分だった。

・70代男性、一人暮らし。中央区で被災。2階から飛び降りて足首を痛め、1週間ほどしてから医者に診てもらった。奥さんとは離れて生活していた。近くの公民館に避難していたお陰で食事や水は不自由しなかった。地震だとは思ったが思いもよらず、暫くは呆然と周りを見回した。3軒先まで火が来たが、崩れた家は燃えなかった。付け火ではないかとのうわさを後で聞き、人の心の闇をのぞいた思いであった。4ヶ月ほど経ってポートアイランドの仮設住宅が当たり、その頃から解体の仕事が回ってきて、とても良い収入になり、それが2年ほど続いた。仮設住宅にいるとき食中毒にかかり、生活保護を受けるようになった。田舎にいた奥さんが亡くなり、7人兄妹も女2人を残していなくなり、今は1人で生活している。左耳が殆ど聞こえない。この復興住宅にはもう11年入っている。前立腺ガンで入院したが、10年再発しなければ大丈夫といわれた。時々囲碁をしたりしているが、余りしゃべれなくなり、人との対話は苦手。仮設住宅に居たときより寂しい。嬉しそうに話してくださったことが、たいへん嬉しかった。

2月28日

・60代女性、2人暮らし。中央区で全焼。隣からの貫い火で全焼。近くの小学校に避難したあと

ポートアイランドの仮設住宅に移る。娘のところが無事だったので、一緒に居たが、やはり不便で仮設住宅に移った。割合早く当って、1回の申し込みでここに入居できた。明るい人で、仮設住宅で行われたカラオケも1ヶ月2回行った。何も不自由はありませんと、いい言葉を聞いた。訪問時のご主人がカラオケに行っているとのこと。女性だけのカラオケと男性だけのカラオケでは、何といっても女性の方がいい。

・60代男性、一人暮らし。東灘区で全壊。一番被害がひどい所だった。高速道路の倒れた所のすぐ近くのマンションに住んでいたから、ものすごい揺れ方をした。テレビが飛んできて頭に当り、卓袱台が股間に当った。「家は全壊、頭は半壊、ここ(股間)は一部損壊」と笑わせる。高速道路は横倒して、斜線の白い筋が見えていたのを走って見に行った。車の中で2週間暮らしてから小学校に避難し、12月まで避難所にいてから仮設住宅に移った。なかなか仮設住宅が当らなかった。物流の仕事をしていたので、休みの日でなかったらトラックに乗っていたと思う。50代後半に腰を悪くして、手術後余り良くない。人付き合いもしていない。親しい友人が一人いて、何かあったときのことを頼んでいる。昔は射撃やゴルフや釣りをしてお金をよく使っていた。腰を悪くしてからは趣味はテレビを見るか本を読むぐらい。生活保護を受けている。ヘルパーは来ていない。買い物はコープの個配を利用。名前をお聞きして表札をなぜ出さないのかとお聞きすると、新聞屋とコープと民生委員ぐらいしか来ないからと。笑顔の良い方で、本当は人付き合いの上手な方ではないかと思った。

・60代男性、一人暮らし。扉が開き、訪問の意図を聞かれたため、お話しボランティアをやっていることを告げると、地震のときの話を始めた。震災時は一人暮らし。和歌山で家族と住んでいたが、別れて神戸に出てきたばかりのときに被災。ガタガタガタ、バリバリバリと学校の窓ガラスが割れる音で起きたら、間一髪でタンスと土壁がそれまで寝ていたお腹のあたりに、テレビが頭のあたりに倒れてきた。避難所は、近所の福祉なんかという建物。多いときには100人を超えて寝る場所がないぐらいのところ、責任者として最後まで残った。仮設住宅はポートアイランドの市民病院の付近。仮設住宅のときも責任者の打診はあったものの仕事が忙しく断っていた。小さい仮設住宅であり、近所づきあいはあった。この復興住宅は竣工当初より入居しているが、近所づきあいはない。今までの一番の悩みは、いつ地震が起きてこの建物が倒れるかということ。テレビに地震の文字が出るだけでぞっとする。心のケアをして欲しいけど他人に分かるわけがないと訴える。地震が起きたら、この建物も手抜き工事のため真ん中で折れて倒れるシミュレーションが頭の中で描ける。しかし、最近是不景気で地震の心配どころではなくなってきた。現在も仕事をしているが、いつ仕事がなくなるかが心配。最後に、ホントに東條健司という人物がいるということを知れて今日はいい時間を過ごせた、と言われ握手をして別れた。40分程度の戸口での訪問。

・40代前半女性。インターホンを押すと、ヘルパーが対応した後、家の中に案内された。地震のときのことは、はっきり覚えている。文化住宅の2階で被災。当時は、テレビゲームをしていて、グラグラグラってきて、地震やと思ったら壁がはがれて空が見えていた。お子さんが怖がっていたので抱きしめていた。揺れがおさまり、気を落ち着けるためにタバコを吸っていたら、近所から「タバコ吸っちゃあかーん」と言う声が聞えてきた。被災後は、近所の小学校の避難所へ。避難所では班長をしているときに色々苦労した様子だった。震災後に病気のため車イスの生活になり、現在はヘルパーが毎日来ている。デイサービスにも通っており、入浴サービス等を受けている。デイサービスでお風呂につかれるから自宅では入浴しなくてもいい。へ

ルパーにペットの世話を頼めないのが不便。約1時間の上がりこみでのお話し伺い。

3月14日

・60代女性、2人暮らし。チャイムを鳴らしても反応なし。御留守かな？と思っているとドアが少し開いた。綺麗にお化粧をされた60代の女性が迎えてくださった。「中は汚いから」と言いながら小さな椅子を2つ玄関へ持ってきて下さった。足を引きずり、這うように動かれるその姿は痛々しかった。坐骨神経症と腰の骨の病気を併発され、足が不自由になったとのこと。「だから玄関まで出るのに時間がかかって。お待たせしてごめんね」。入居12年目。やっと抽選に当たってこの復興住宅に入居する以前は、震災で全壊した自宅にビニールシートを敷いて2年間暮らしていた。37歳の息子さんと2人暮らし。ご主人とは震災前に離婚。生活が苦しくなり始めたのは数年前。息子さんは、器具購入の費用がかさみ、また料金未納のお客様の増加、不景気による仕事の激減により、借金が膨らんだ。退職するまでずっと働いていたが、今は足が不自由で働きに出ることはできない。そんな中、息子さんは事故を起こし、むち打ち症に。車は廃車。息子さんは十分に動けない状態だが、数少ない得意先の信用を失うわけにはいかず仕事に出ている。借金は、サラ金に関しては自己破産で清算したが、上司のついでで借りた多額のお金にはまだ返済義務があり、年金を担保に返済している。ここまで何度も涙をぬぐいながら話して下さった。生活保護はどうかと打診するが、「九州女やから、迷惑はかけられない」。食器を洗おうとしても、頑なに遠慮される。息子さんは、自分の存在が母を苦しめている、と考え死をほのめかしているという。毎日、ちゃんと帰ってくるかが心配、と言ってまた涙を流される。彼女は生後2週間するとき、長崎で被爆しており、交通や病院にかかる費用は無料。煩わしがって手続きを怠った代わりに被爆者手帳を申請してくれたお母さまに感謝していた。近所づきあいはない。自治会もなく、誰にも頼れない。「私たちは何もできません。ごめんなさい」と参加者の一人が言った言葉にも、「大丈夫です」と強く唇を噛みしめた後、笑顔を見せられる。「働きたくても働けない。この足さえ…」と何度も漏らし、泣いていた。それでも終始崩れない凛とした表情に、ある参加者の言う九州女の強さが見えた。「ハイビスカスが好き。あの強さと赤い色、エネルギーがそこらじゅう」。『雑草のように生き抜いてきた』彼女こそ、ハイビスカスそのものだと思った。

・50代女性、一人暮らし。中央区で全壊。近くの会社に避難し、1フロアにいた高齢者が多い100人ほどを世話する責任者になった。すべての避難者の行き先が決まってから、最後に出て、りんくうタウンの仮設住宅へ。この復興住宅は竣工が遅かったため、ポートアイランドの仮設住宅で1年間待ってから入居。4人の子どももここから独立していった。3年前には大病をした。今までは必死でした。今は腎臓を患っているが、薬と食事療法で、透析にいたらないようにしている。日頃通っている教会でも毎年亡くなった方への慰霊祭をしている。何もなかったように生活しているが1・17が来ると色々と思い出す。

3月28日

・60代男性、一人暮らし。長田区で全壊。住んでいた文化住宅に約2週間生き埋めになっていたため、足の感覚がなくなり下半身不随に。救出後4ヶ月間入院しているうちに自宅が解体され、何も取り出せなかった。その後4年あまり、あちこちの病院に入院したのちこの復興住宅の車いす対応の部屋へ。部屋ではベッドの上で時間を過ごす。時折足を動かし、関節が固まらない

ようにする。食事は1日1回で全部済ませる。最近トイレの時間が長くなってきたのが心配。車いすのままでもできるよう台所の流し台まわりを改造してもらった。画質にこだわって大型プラズマテレビを3台買い換えた。ベッドの上からこれら操作できるよう、マジックハンドのような道具を自作した。執拗な新聞の勧誘や訪問販売などへの対策として、玄関とスロープで外に出られるベランダの両方にCCD付のインターホンを自分自身で取り付けた。画像は録画して大型ディスプレイでも見られるようになっている。上半身の自由を最大限以上引き出す工夫と、自立への強い意欲に感心させられた。2時間近くにわたる、お部屋に上げていただいておりますし伺いとなった。

・80代女性、一人暮らし。中央区で全壊。生粋の江戸っ子でお嬢様育ちなので、復興住宅の人々になじもうとしてもなかなか受け容れてもらえない。ほとんど寝たきりの状態で、現在入院中のため、留守番の方からお話し伺い。

・50代女性。ご主人とお母さんと3人暮らし。話に応じてくれた女性は、最初は厳しい表情。まなざしもきつかった。生活に疲れきった、といった印象。ドア越しのインタビューとなった。震災当時は、ご主人と2人でケミカルシューズの部材の卸売業をやっていた。避難所にしばらくいた後、姫路の社宅（家賃無料）に約1年いた。その後、姫路の県営住宅に3年ほど住んだ。両親が兵庫区に住んでおり、借家は半壊。一人っ子だったため、仕事を持っていた父親を神戸に残し母親を姫路に連れていった。母親は目が不自由（全盲で障害者1級）。震災で長田のケミカルシューズ業界が壊滅状態になり、部材の卸売業が続けられなくなり、ご主人は慣れぬ漬物屋に勤めた後、NHKの集金人になった。神戸に戻ったのは、母親が父親のいる神戸に帰りがつたため。ちょうど神戸市から送られてきた市政だよりで復興住宅の募集を知った。ご主人は神戸に戻った後もしばらくNHKの集金人をしていましたが、賃金の割にノルマがきつく辞めた。父親はその年の10月にガンで亡くなった。その後、小さな車を買って、夫婦で宅配便をやったりしたが、ガソリン代を払うとほとんど残らなかった。ご主人は現在、ビル管理会社に勤めているが週に3~4日ほどしか勤務できず、賃金も安い。奥さんもアルバイトをしているが、足に人工骨を入れており長時間立ってられない。なんとか生活をしていけるのは、子どもがなく、家賃が安いほか、母親の障害者年金があるからだ。その母親も80半ば。最近では認知症がでていっている。いつ亡くなるか分からない状態で、亡くなれば年金がもらえなくなる。将来の生活を考えると不安でたまらない。今、一番困るのは銀行が近くにないこと。以前は交番の横にみなと銀行の引出し機があったが、いつの間にかなくなった。不満なのは駐車場料金が安いこと。月2万円もする。車椅子の障害者がいる家庭は無料で借りられる。それなら、全盲の家族がいる家庭も無料ないし割引価格で借りられないものか。ここに来る市の職員に話をしても「私らではどうもできない」と逃げられてしまう。話を伺っている間に、相手の表情が和らいできて、正直ホッとした。何らの罪もない人々が、天災のために肉親や仕事、家を失い、生活苦に追い込まれる現実。格差社会が広がる中で、被災地がますます取り残されていくのが実感だ。国や自治体は何のために存在するのか、と改めて考える。

・70代女性、一人暮らし。兵庫区で半壊。3人で訪問したが、事前のチラシ配布で訪問を知っており、快く迎えてくれた。1DKの室内には、近所の県営住宅に住むという女友達が遊びに来ていた。6畳ほどのDKはミシンと生地のカット台など洋裁の用具一式が置かれているほか、テーブル、冷蔵庫と茶箆筒だけで極めてシンプル。小綺麗に片付けられている。セーターに刺繍入りのベスト、髪もよく整い、薄い化粧を施しており、非常に若々しい印象。話し声も明るく、

テンポがいい。紅茶をご馳走になりながらのお話し伺いとなった。女性が洋裁の道に入ったのは20歳の時。当時、山本通りにあった中国人が経営する店で6年間見習い修行した。顧客の大半は総領事館勤めをする外国人の婦人だった、という。その後、小規模ながら自分の店を持ったこともあったが、結局は兵庫区にアパートを借りオーダー洋服を仕立てていた。被災地は兵庫区の平野。アパートで母親と2人住まい。2部屋借りて1室は仕事場に、もう1室は母親の住居を兼ねて寝起きなど生活の場に使っていた。震災の被害は軽微。茶筆筒のガラスが2枚割れ、テレビが台から落ちた程度。アパートは半壊だった。震災時は、母娘ともよく眠っていたため、地震そのものの恐怖は感じなかった。「ひどい目に遭った人には本当に申し訳ないと思うけれど、そのあとの余震のほうが怖かった。幸い知人には死んだ人もいなかった」と話す。近くの避難所で2日過ごし、加古川の親戚宅に母親と身を寄せた。2カ月後、アパートが補修され、元の住まいに戻った。しかし、震災のダメージは予想外に大きかった。被災による生活苦からか、洋服のオーダーがすっかり減ってしまった。加えて顧客も年々高齢化し、注文の減少に拍車をかけた。同居していた母親を5年前に84歳で亡くした後は、「気が抜けて仕事する気も出ず、1年くらいブラブラしていた」。その後、呉服を洋服に仕立てる四国の業者を従姉妹に紹介された。業者からは、次々に仕事が舞い込む。「私は手がキレイだから」と。“手がきれい”とは、業界用語で「腕がいい」ということらしい。「寸法を取ることから仕立てまでできる人はあんまりいないから」。その道一筋に半世紀余りのプライドを垣間見た。母親と同時期に弟と妹を相次いで亡くしたほか、これまでの生涯を独身で通したため、家族はもう誰もいない。「家賃は安いし、食べていければいい。目も悪くなってきたし…。だから仕事は3時間か5時間程度で終え、頑張らないんです」と笑う。「毎朝、目が覚めた時に、今日も生きてるんか。アレもコレもやらないあかんのやな」と考えると。現在は「コレというほどの不満はない」そうだが、「ここに来てから、市の人も区の人とも一度も来てくれない。民生委員の人の紹介さえない。『勝手に住んどけ』という感じ。もし体の調子が悪くなって動けんようになったら、どうしたらいいんやろ」と不安そう。「『勝手に住んどけ』という感じ」の言葉が、胸にズシンと突き刺さり、その一言は“棄民”という言葉に連想させた。女性ながら、洋裁の腕前一つで家族を支え、50年余を生きてきた誇りに満ちている。その一方で、家族のために自分を空しくしてきたのではないだろうか？この人に限らないが、ひたすら真面目に生き抜いてきた人々が、身寄りもなく晩年を迎えた時に、行政を含めて私たちは何をしたらいいのだろうか？

4月11日

・80代女性、一人暮らし。灘区で全壊。今日は病院に行くから忙しいと言われるが、被災地はどの問いに「灘区で全壊だった」とお答えに。何が起こったか分からなかった、私は埋まっていたから。両隣は一人ずつ亡くなった。埋まっていたら、お孫さんが助けに来てくれて病院へ。頭を7針縫うケガだった。その後は親戚の家には気が遣って大変だった。六甲アイランドの仮設住宅を経てHAT神戸に入居してちょうど10年。最初は皆知らない人ばかりだったけど、今は仲良くやっている、同じフロアの女性を集めて茶話会を開いたりしている、と明るく語る。私の世代は戦争も経験した。17歳で徴用され見習い看護婦として大阪の病院に勤務。ちょうど空襲があり、とても大変だった。「戦争にも震災にも遭い生き残った。私には生きる使命があったんだと思う」、その力強い言葉に重みを感じた。息子さん3人を育てあげて、8人の孫、2人のひ孫がいるとのこと。明るく、時に力強い語りにたくさんのことを教わった気がする。

・70代女性、息子と2人暮らし。震災当時は、2階建て上下6戸の文化住宅の一階中央の部屋に夫と2人で住んでいた。震災では1階部分がつぶれて、2階が落ちてきた。6畳の間に布団を並べて夫と寝ていたが、傍らのタンスが倒れて引き出しが飛び出し、その間に挟まれて身動きができなかった。夫の様子は見えず、最初は声をかけると返事があったが、次第に声が聞けなくなった。2階の落ちた柱だろうか、それを血の出るほど叩き、声を限りに助けを求めた。そのうち、2階に住んでいた若い兄ちゃんが気づいてくれて「おばちゃん、どないしてでも助けたる。頑張れよ」と声をかけ続けてくれた。姫路から来た消防隊に足から吊あげられて救出されたのは午後4時。「まだ主人がいる」と訴えたが、「残念ですが、ご主人の応答がない。他に救出しなければいけない人が沢山いますので…。申し訳ありません」と消防隊員は頭を下げられてしまった。お隣のご家族は3人か4人なくなったそうだ。夫の遺体が掘り出されたのは2日後。警察官に「ショックが大きいだろうから見ない方がいい」と勧められて、死骸を見れなかった。家財も一切持ち出せなかった。夫の遺体は集会所にほかの方の遺体とともに収容されたが、検死葬場の関係で「2月中の葬儀は無理」といわれた。実家から弟が駆けつけて警察と交渉し、葬儀は身内だけで執り行った。3年半ほど、そのまま弟の世話になり、この復興住宅に入った。今まで生きてこられたのは、震災前から書道と短歌に親しんできたからかもしれない。3年前からは短歌の先生の都合で短歌が習えなくなり、俳句に切り替えたという。現在は息子と2人暮らし。外目にも疲れの色は隠せず、生活の大変さは相当のものだろうが、あえて多くを語ろうとしない。「俳句と短歌のおかげで頭だけはしっかりしているから」と表向きはあくまで気丈。どれだけ話しても他人には本当のことは分かってもらえない—そんな一種の諦念のようなものさえ感じられた。俳句と短歌を一首ずつ紹介しておこう。「わすれない あの日の苦しみ 五時四十六分 むだなく生きて 亡き父に語ろう」「シニアとて 革命ありや 花茨」。心の奥底のやるせない、悲痛なまでの叫びを聴いた。

4月25日

(記録なし)

5月9日

・60代男性、子どもと妻と4人暮らし。長田区で全壊（アパート）。被災時は1歳と6歳の子どもがあり大変だった。妻が神戸出身のため、1974(昭和49)年、大阪から長田区に引っ越した。市場の魚屋で働いていた。その後トラックの運転手をするも手取り13万円ほどで生活は苦しかった。今は仕事がまったくなくて困っている。1回3時間、時給1000円で清掃のアルバイトをしていて、足りない分は生活保護を受けている。妻は現在、統合失調症で働きに出られないので自分が働くしかない。自分はアルコール依存症で、糖尿病のため、今は断酒会に入り、自分を戒めている。長男は高校を卒業し独立しているが、次男はまだ高校1年生のため、生活は苦しいが、授業料約2万円を何とか工面して支払い、高校を卒業させてやりたい。これが夢であり、頑張っていきたい、と切実に話された。しかし、まともな仕事がないので困っている、と繰り返し話された。

・70代男性、中央区で全壊。震災時は2階から降りられず4時間くらい閉じ込められた。避難所に入れなくて大阪の公団住宅に。大阪の方が当たり易いということだった。そのときは親と一緒にでた。やはり神戸がよいと思う。兄姉はたくさんいたが、末っ子で、兄の援助を受けた。

現在は兄が奈良で母親をみている。自分は震災当時は55歳で無職であった。昔から友人の出来にくい方で、若いときの働きのおかげで、今は国民年金と厚生年金のおかげでやっている、1人なので何とか生活ができています。先般、胃腸の病気で入院していた。今は、お隣さんとだけ行き来している。会えばお喋りしているだけである。まーテレビが友人と言うところで。コーヒーは何杯も飲んでいる。足が時々、こむら返りすると云われたので、もしかしたら水分の不足かもしれないと思うと話した。東條代表の名札を見て、あなたが東條さんですかと、たいへん喜んでおられた。東條さんの名前は以前からよく知っているとのこと。14年目の感想としては「生きていてよかった」と言われ、明るい受け答えの会話はたいへんよかった。

・50代女性。灘区で被災。1階は全壊、2階にいたので助かった。仮設住宅は北区の鹿子台。震災時のショックで、今でも精神科のカウンセリングに通っている。肝臓が悪いため内科の病院にも行っている。この復興住宅は6回目ようやく当たった。1人暮らしだが、隣近所との付き合いがあるのおかげで何とかやっている。

5月23日

(新型インフルエンザのため中止)

6月13日

(「念のため」中止)

6月27日

・60代男性、夫婦2人暮らし。室内にて1時間程度お話し伺い。1970(昭和45)年から住んでいた中央区内の市営住宅で被災。半壊となるがご自身に怪我は無し。奥様が炊事中であったが焼けどを負う。奥さんの母親が西宮で亡くなる。その後小学校で避難生活をおくる。仕事もしていたが十分に睡眠がとれなかった。自衛隊の風呂に入った。シャワーのサービスがあり助かった。その後被災した市営住宅を応急処置し再入居(現在住宅は取り壊され更地)。自営業で保厚生年金などには加入しておらず国民年金のみ。まわりには無年金の方や生活保護に頼っている方も。3年前に肺炎を患い禁酒・禁煙を継続。ただやめたら元気がなくなる。付き合いもなくなる。2年前に肩が複雑骨折となり仕事を休んでいる。今の住宅は1DKの1人暮らしの人が多い。「9割方は震災を知つとるんかな」とのこと。部屋の中は整然としていた。話し途中で奥さんからお茶をごちそうになったが奥さんも元気そうであった。口調もしっかりしておられた。途中で窓を開けていただいたが、国道・高速道路沿いでクルマの音で騒がしかった。

7月11日

・60代女性、2人暮らし。灘区で被災。母が避難所になじめず、自宅前の空家に入居。この復興住宅には竣工当初から。兄が7年前に亡くなってから母は認知症になり現在入院中。寂しがないように犬を飼っている。

・70代女性、2人暮らし。中央区で一部損壊。修繕中は近くの小学校に半年避難したが、その市営住宅の解体により、5年前この復興住宅へ。訪問時は出かける準備をしていた。西区に住んでいる息子さんがむかえに来て、お嫁さんがつくった料理を戴くとのこと。圧迫骨折のため腰や足を痛めて入院し、一時は車イス生活になったが、今では歩行器を使用して歩けるほどに。

ご主人も5～6回入院した。震災のことは忘れた。十何年も経ったら思い出になることもあるが、逃げたことなどイヤなことは忘れた。

・30代男性。中央区で一部損壊。一般入居の抽選を受付るようになって間もなくである2年前に、この復興住宅に。被災当時は高校3年生で、通っていた学校は休校になり、進路のことで走り回っていたいへんだった。

7月25日

・70代女性、夫婦2人暮らし。東灘区で全壊。ご主人は10tトラックの運転手で、70歳で引退するまで50年間無事故無違反で通し、奥さんも60歳で定年になった後ご主人の仕事を手伝うようになり、夫婦でトラックに乗り込んで仕事をしていた。震災も神戸から大阪方面に向かう途中で遭遇、パンクしたような音がして、橋が落ちているのが見えた。直接危ない目に遭わなかったが、車の中で震災のニュースを聞いていっそう怖くなった。2ヶ月間トラックで生活、着替えも洗濯もできなかった。1週間ほどすると仕事が入り、移動先でやっと入浴できた。仮設住宅では隣近所のつきあいがあったが、この復興住宅に来てからはない。ご主人はお元気そうだが、奥さんは6年前に脳梗塞を患い半身不随に。できることは何でもするようにしている。

・70代男性。夫婦2人暮らし、灘区で全壊。公園でテント生活をしていたとき、勤め先からコンテナハウスをもってきたり、トイレをつくったりして喜ばれた。ポートアイランドの仮設住宅を経てこの復興住宅に入る中で、「防災のことは人ごとではない」と、消防署での講習に参加して防災意識を高めたり、行政と渡り合ったりするなど、一生懸命に取り組んできた。少年時代から相撲が得意で屈強な体格だが、仮設住宅在住のとき腰を痛め、手術しても治りそうにないほどであったが、中国医学の治療を受けて快復した。治療費に健康保険が適用されなかったが、義捐金でまかなうことができ助かった。健康管理の大切さを痛感している。

・20代女性。中央区で被災。被災当時、中学入学を控えた小学6年生だったが、いまは3人の女の子の母親になっている。

8月8日

(記録なし)

8月22日

・70代女性、一人暮らし。中央区で全壊。震災時は入院中の父に加え、地震のショックで切迫流産しかけた娘さんに付きつきりとなり、ついで母も入院し、避難生活の中で両親を亡くした。避難所にいなかったため、さまざまな手続きについての情報が得られず、義捐金はもらえず、仮設住宅にも入居できず、高い家賃の借家に。5年ほど前にもお話し伺いをさせていただいており、そのときの東條健司代表をよく覚えている。その後この復興住宅の状況も変わってきて、最近では隣近所の人とはあいさつをする程度で、それ以上は接しないようにしている。

・50代女性、中央区で全壊。震災時小5だった娘も今25歳、避難所になった小学校は、翌年度まで統廃合されず、友達とも卒業まで一緒に過ごせた。ポートアイランドの仮設住宅からもとの自宅近くの中学校に通ったが、この復興住宅入居後は近くの中学校に。仮設住宅でのボランティアと最近まで交流があり、私たちの訪問にも「ボランティア、懐かしい」と喜んでくれた。

・60代女性、中央区で全壊。震災当時は、近くの公園のテントの下で親子8人（男の子4人、女

の子3人)が生活してきた。水がなく、トイレも不便で大変だった。しかし、週に何回か車のタンクローリーからバケツ1杯の水ををいただき、嬉しかったことを昨日のように思い出す。助かった。風呂は1週間に1回と決められていた。風呂のありがたさも子ども達は体験したので今は水も大切に使っているようだ。当時、風呂で洗濯をしている人があり、自分が風呂と水は、今一番大切なのでここでは洗濯をしないように勇気を持って注意した。みんなの気持ちも同じだったと思う。自分だけでなく、人のことを思う気持ちが大切と話された。母子家庭のため、収入も少なく、援助も受けていたが食べる物はなく、生活は大変だった。パンの配給があったが、毎日のようにアンパンだけでは栄養が偏り、病気がちの自分は精神的にも落ち込んでいたが、子どもたちのために頑張ってもらったと思う。震災時は、これからは特に食事、食べ物をバランス良く与えられるように準備することが大切と思います。自分は震災当時、40代であった。今は、孫に囲まれて生活している。子どもたちもみんな割りと近くに家を持ち生活しているので普通に幸せかもしれない。しかし、これからは自分の健康が気になるが、声は大きく、いつも明るいので、楽しく生きて行きたいと軽く話しておられたのが印象的だった。

・80代、灘区で被災。家は半壊と思っていたが震災直後は何かと忙しく余裕がなかったため届出が遅くなり、立会いも出来ず、一部損壊とされた。支援金は何もいただけていない。同じ程度で半壊になった人もあり、支援金をもらったと聞いて、羨ましく思ったこともあった。80代の母は今日、週に3回必要な人工透析を受けるために入院中とのこと、もっと以前からしていれば良かったかもしれない。何でも早め、早めがよいと思うと娘さんは話された。名谷の市営住宅からこの復興住宅へ来た。当選してよかった。ここは割りと三宮にも近いので買い物にも便利でよい所だ。母は頑固で食事の味付けも別で、たまに喧嘩もするが、母のためにも頑張りたいと、にこやかに話された。親おもいの娘さん(50代)だった。

9月12日

・80代女性。一人暮らし。長田区で全壊。5~6軒長屋の1階で、2階が1階に倒壊。避難所に1年。その後、西区の仮設住宅に2~3年居住。仮設住宅は人がいないので怖かった。バスがないので不便だった。兄妹は4人。お子さんは4人。現在は、孫が2人、ひ孫が3人。一番下の息子さんとは、電話で連絡を取るとのこと。兄とは別に暮らしていたが、年前に亡くなった。生前は人工透析をあちこちの病院で受けていた。兄のために購入した車イスを、大事そうに今でもお部屋に保管しているのを見せていただいた。ご主人は33年前に亡くなった。普段は、ケヤキ広場に散歩に出るが、お伺い当日はあいにくの雨。雨の場合は、玄関表の廊下を運動のため、往復されているそうです。また、住宅入り口エントランスでくつろぐことも。1週間に1回ヘルパーに来てもらっているそうで、部屋はかなりきれいに。いざという時のために、役員さんに鍵を預けているとのこと。防犯のため、息子の大きな靴を玄関口に置かれていた。1時間近く、重苦しい内容を明るく気持ちよく話されていたのが印象的だった。

・30代女性、中央区で半壊。被災後もずっとそこで暮らした。結婚して子どもができたため、抽選で応募したところ1回で当たり、この復興住宅に引っ越した。家族3人仲良く暮らしている。

9月26日

・30代男性、一人暮らし。灘区で全壊。家の下敷きになり身体がはさまれて身動きできなかった。まもなく火災になり木などが緩み身動き出来るようになったので文字通り、火事場の力を出し

てようやく逃げる事ができた。死を感じた。今もはっきりとその時のことを覚えている。はさまれて閉じ込められた時間は、動揺していて、はっきりとは覚えていないものの、1時間程度だろうと思うが、長い、長い時間に思われたようだ。15年たった現在も顔と手と足にやけどの跡が残っていると、足をこすって見せておられたのが印象的だった。震災直後は医者もいないため、後で医者に行った。15年前のことは今も心に残っている。震災による心の傷は今も癒されてはいないようだ。火事場の力を出して逃げた後は実家が気になり駆けつけた。半壊ながらもたいへんだった。母の店は全壊で何も無い状態だった。母上の気持ちを思われて話されている表情は真剣だったがその後は明るくされて、我々ボランティアもホッとさせられた。

・70代女性、灘区で全焼。近所の人に引っ張りあげられて助かった。今は息子さんと2人で住んでいる。「九州の出身ですので明るく生きています」とのこと。この復興住宅には2年前に入居。まだ隣近所のこともはっきりとは解っていない。前向きな方だった。

・玄関口にてお話し伺い。元気になっています。復興住宅ができてすぐから住んでいます。それより前は、話したくないです。思い出したくないです。

・30代。兵庫区で被災。近くの公民館に避難。西区の仮設住宅に入居。この復興住宅には入居11年。玄関口にてお話し伺い。

・10代。家族5人暮らし。震災当時は3才。3階建ての建物の3階に住んでいた。家から出てすぐに3階建ての建物がつぶれたのを覚えている。近所の仲のよかった友達が地震で亡くなっていた。そのことを人づてに小学生高学年くらいになって知った。震災後は避難所に入った。避難所外に遊びに行ったあとは、迷子になることが多かった。仮設住宅は北区。我々よりずっと背の大きい子だったが、いろいろとお話をきかせてくれた。

10月10日

・70代女性、東灘区で全壊。青木の近くの老人ホームのような所で避難していた。その後六甲アイランドの仮設住宅に3年近くいた。ふれあいセンターにはあまり行かなかったが、隣の人とよく話をした。仮設住宅では市役所の人もお隣の皆さんも私達に親切にしてくれた。しかし、中には意地の悪いボランティアもいた。貴方達のような方は珍しく嬉しいとの言葉をいただいた。この復興住宅も市役所の担当者の人のおかげで当たったと思います。部屋も広くて気に入っている。主人は西宮の日本盛の近くの生まれ、自分も若い頃は日本盛に勤めていた。主人は昨年12月に胸の病気で亡くなり、寂しい日が続いた。足が弱っているため3年前から自分は電動自転車で買い物にも行く。今は少し明るく生活している。火曜日と木曜日は必ず、神戸港湾医療保険協会へ行きリハビリを続けている。おかげで足腰以外は元気で電動自転車で散歩も続けている。4年前に心臓の手術をした。ヘルパーさんは、週に2回来てくれている。近所との付き合いはあまりない、仮設住宅と違って一度ドアを閉めたら声も掛け合わない。買い物に行けて、まあ元気なことが嬉しい。絆が欲しい時もあるが子どもはいないけど、あってもたいへんな人もいるからとサバサバとしておられた。今後、震災時に何に注意すればよいかの問いに、今後は非常時でも心を落ち着けて慌てないことが一番大切と話された。話の終わりには、われわれボランティアにも気を使っておられるようだった。部屋で50分のお話し伺い。

・60代女性、灘区で全壊、震災時は3人暮らし。税務署近くのアパートが全壊、2階だったが全員無事に逃げられた。近くの避難所で4ヶ月。比較的年が若かったので1999(平成11)年まで西区の仮設住宅にいた。何回目かの抽選でこの復興住宅が当たった。今年2月ご主人に病気が見つ

かり入退院を繰り返している。奥さんは60代、ご主人は70代。ご主人は体が弱く10年近く介護していて辛そうだ。植木が趣味で玄関の前はきれいに鉢が並んで植木が生き生きと輝いていた。娘さんには女の子があり、孫は可愛いですね、と潤んだ瞳をみせておられた。奥さんはカラオケが趣味だったがとてもつらく5月からやめてしまったとか。主人は闘病中で頭の毛もなくなっているが、電動スクーターで散歩に出かけるのが唯一の楽しみ。近所のことはドアを閉めると中の様子がわからないので、この近くでも孤独死を知ったのは、ウジ虫が隣や下に落ち始めてから。今後、震災時に気をつけることは、防災靴、懐中電灯と避難場所は心得ておくことなどと話してくださった。ボランティアの1人と仮設住宅が同じと判り、しばらく話が弾んだ。

- ・60代女性、東灘で全壊。六甲の仮設住宅に母親と2人暮らしだったが、自分の病気のため母親をみられないため、1年も経たない間に、老人ホームに入れたとのこと。今、困っているのは金銭面のことだが、土地が少しあるので、生活保護も受けられないと嘆いておられた。先般、隣の人から「助けてくれー」とベランダから言われて110番してあげたが、そのとき隣の部屋がゴミだらけで、ゴキブリもいたことが今も気になっている。ここは自治会もないのでどこへ言えばよいか困っている。力強い口調で相談ごとなどを語られた。傾聴ボランティアとしては何処まで踏み込めるのか課題だと思った。

10月24日

- ・70代男性、一人暮らし。灘区で全壊。仮設住宅は世話をしていたので楽しかったが、ほとんど友人はなくなり、もう行き来はない。今の楽しみはベランダで雀にエサをやることぐらい。娘は月に1回くらい来てくれる。妻がレシートを貯めていてくれたので、ときどき1時金みたいに振り込まれる。月1回お巡りさんがチラシ配りをしてくれる。週2回のヘルパーさんも3回にしよう。ご飯だけは自分で炊いている。「3年間で2度脱水状態で救急搬送されたので、誰にも迷惑をかけずに人生を終えたいと思う」、「膝が弱って来て、銀行・郵便局が無くなったので、ATMまで行くのが大変」など、手が震える中を努力して支援シートに自ら記入して訪問を心待ちにしてください。頑張った人が元気でいてほしいと、必死で願った65分だった。
- ・80代夫婦、東灘区で被災。2階が1階を押しつぶすように家が倒壊して、娘さんと、奥さんのお母さんを亡くしたが、23日まで火葬もしてもらえなかった。一人娘を亡くしたことは何よりも悔しい。今でも娘さんの同僚が1月17日にお参りに来てくれる。時には甥の家族が来てくれる。親戚の家に約2カ月世話になり、その後仮設住宅に4年近く。最後近くにはもう残っている人もまばらだった。ご主人は肝臓が悪く、パーキンソン病もすこし入ってきて、時々足が勝手に動くんですよ、と笑う。何よりの救いは奥さんが若々しく、兄弟いとこの助けがあればこそと。公団借り上げの市営住宅であるこの復興住宅の家賃が、今後どこまで値上がりするかが一番心配とも。45分の上がり込んでのお話し伺いの後、お線香を上げさせていただいた。

11月14日

- ・80代女性、夫婦2人暮らし。灘区で全壊。避難所はあまり大勢ではなく過ごしやすかった。六甲アイランドの仮設住宅を経てこの復興住宅に。補聴器を手にしながら、介護で疲れた身体を休める時間を割いてお話し伺いに応じてくださった。被災時1階で寝ていたご主人は、被災当日の23時頃になってやっと救出され、今年1月に倒れて7ヶ月入院、現在は要介護4の車イス生活だが耳はよく、お互い助け合って生活しているとのこと。

・70代女性、一人暮らし。灘区で全壊。被災後大阪へ避難。ずっと暮らした神戸に戻ろうとこの復興住宅へ。若いときは一人で生きていくのに必死だった。5年前まで働いていた。今は腰痛を抱える以外は健康とのこと。

・70代女性、一人暮らし。東灘区で全壊。六甲の仮設住宅にお父さん（当時86歳）とご主人の3人で入居。お父さんはすぐに仮設住宅で亡くなった。お母さんは1994(平成6)年に亡くなっている。12年前にこの復興住宅に引っ越す。ここに入居して3ヶ月でご主人が心臓麻痺で亡くなった。突然亡くなり病院への搬送などいろいろとたいへんだったが、娘さんがやってくれたそう。今は一人で寂しい。娘さんが近くの市に住んでいる。小学6年の娘、高校生の息子の4人暮らし。できたら小学生の孫と中学の3年間、ここで一緒に暮らしたい。神戸市の住宅課に行ったが駄目だった。どうにかならないのかと相談を受ける。一人暮らしだから孫と暮らすと助かる。孫もここにきたいと言っている。小学生だが何でもできる。一緒に暮らせたらいいのだが、としんみりと言われた。体はヘルニアで、できるだけ歩くようにしている。ぜんそくには海風がいいので近所を歩くようにしている。

・70代女性、灘区で全壊。健康状態は今のところ良い。震災後苦労されたのは、一人暮らしなので働かないと暮らせないこと。今一番心配なことは、数年先の生活費。2010(平成22)年4月から国民健康保険の自己負担が1割から2割になるのは困る。バス、地下鉄、ライナーなど以前のように無料にして欲しい。その他、JR、阪神、阪急電車も70歳以上は半額くらいにして欲しいとの要望。販売の仕事に就いたが、1ヶ月で店を閉められ、給料を支払ってもらえず、相手の会社には連絡が取れず、色々手をつくしたが、結局泣き寝入り。「私にとって10万は大きいのですが、どうしようもありません。何か良いアドバイスはありますでしょうか?」と、達筆なしっかりとした字で書かれた支援シートをいただいた。

11月28日

・70代女性、夫婦2人暮らし。須磨区で全壊。1時間ほど玄関でお話し伺い。尼崎市の市場で総菜屋をしていたが、震災の前年に尼崎から須磨区に引っ越し、母親と同居していた。震災の時は、尼崎のまだ荷物の残る部屋にいたが、このアパートも全壊。自分の部屋はかろうじてドアが開いたが、他の部屋はひどくつぶれていた。その後、尼崎の知り合いの家にお世話になり、仮設住宅には入居していない。この復興住宅も10年前の4月に入居。近所に母親と同居する妹がいたから。仮設住宅に住んでいないので一般枠での募集で入居。この面でも何とかしてもらいたい。ここは旧公団から20年借上げの市営住宅で10年後には出るようになるらしい。私の部屋は3LDKで公団。ワンフロアに一部屋だけ、この部屋の上下に公団の部屋がある。今は夫婦の国民年金とそれぞれのパートの収入があるからやっていけるが、これから先が不安。とても10万円の家賃は払えない。市の住宅の担当の人とも相談して公営住宅に応募しているが3回外れた。自分は大阪方面のホテルの清掃の仕事をしているので、6時ごろの電車に乗る。ここの棟は清掃のプロが各階に1人はいるから清掃の人も手を抜けず、いつも廊下やエレベーターの中はきれい。だから、どうしても交通の便のいい住宅しか住めず、郊外の住宅は倍率が低い住めない。便利のいい住宅は倍率が高くなる。私みたいに70歳になっても働き、自立できる高齢世帯の応援を行政もすべきだ。働いている高齢者の支援をもっとして欲しい。自分の希望はこの近所の住宅に入居すること。妹夫婦もおり、仕事にも行ける。何とかして欲しい。夫婦とも長田区出身。ともにケミカルシューズの仕事をしていた。私は縫い子。主人はゴムを伸

ばすロール工。知り合いの紹介で尼崎の市場で店を開くことになった。30年ほど店をしていた。今、主人もアルバイトをしている。お互い、働ける間は働こうと思っている。気さくで元気のいい奥さんだった。商売でも立ちっぱなしのお仕事で、今でも足腰は丈夫そう。1時間ほどの立ち話でも平気なようであった。

12月12日

・80代女性。震災時は息子さんが東灘区で全壊、本人は尼崎で入院中だった。ご主人を40代で亡くし、筋肉が弱る病気と腰痛を患っている。寂しくないし、今は安心して暮らしている。

・70代、中央区で半壊。所有していたビルが半壊となり、事情があって手放した。震災の時火が出なかったのが幸いだった。この復興住宅に入居して6年だが不自由はしていない。家賃がもう少し安ければいい。

・20代男性、中央区で被災。住める状態ではなかったが全壊判定にならなかった。仮設住宅には入らず姫路の親戚宅へ。復興住宅入居に不利となったため、竣工が遅かったこの復興住宅へ。

・60代女性、東灘区で被災。娘さんと同居。もう一人の娘さんが双子の出産のため入院中で、その看病と孫の世話に追われている。被災当時少年であった息子さんも独立しているが、近くの公営住宅に住むようになり、やはり孫の世話などをあてにされているとのこと。

・70代夫婦2人暮らし、東灘区で全壊。六甲アイランドの仮設住宅からこの復興住宅へ。入居申し込み当時、奥さんがまだ60歳に達していなかったため、高齢者世帯として優先されなかった。下敷きになった人を皆が持ち寄れるものを持ち寄って助けようとしたというお話しは、初参加者の心に残った。

12月26日

・70代女性、夫婦と娘さんの3人暮らし。灘区で全壊。親族のアパートに避難した後、民間賃貸住宅を経て、旧公団に申し込んでこの復興住宅へ。2年に1度家賃が上がり、今度上がれば上限に。生活は、年金のほか、週2~3回のご主人の仕事と、娘が出してくれている分でまかなっている。70歳過ぎるとしんどい。不自由したが恵まれている方だと思う。

・40代女性、長田区で一部損壊。揺れで死ぬかと思った。水道が出てもガスが出ないと入れないので、風呂に困った。近くの小学校に2~3ヶ月避難。市営住宅を申し込んでいたがなかなか当たらず、粗末ながら家賃の高い文化住宅などを経て、旧公団に申し込んでこの復興住宅へ。

「生きてなんぼ、命を大切にしてほしい」と16年目の「1.17」を控えてのメッセージ。

・70代女性、夫婦2人暮らし。東灘区で全壊、近くの小学校に1月余り避難した後、希望していたところがなかなか当たらず北区の仮設住宅へ。寒かったが、ふれあいセンターでお茶を飲んだりしたことを思い出す。3年8ヶ月過ごしたが、最後の半年はうちだけだった。旧公団から借り上げた市営住宅であるこの復興住宅に。年金が少なく家賃は低減されているが、値上げされた。

・60代女性、中央区で全壊。留守だったがシートに記入して下さった：家探しに苦労しました。水、食べ物に苦労。家賃の軽減をお願いします。

・30代女性。被災者枠ではなく一般入居とのことだが、インターホン越しにお話し伺い。震災の年に成人式をむかえた。犠牲者をもっとも多く出した大学に通っていたので、地震発生がもう少し遅かったら自分も…。